平和を願って

厚生中学校　代表者

令和五年八月五日、初めて広島の街を訪れました。広島の街は人々の活気に満ちあふれており、緑豊かな街でした。しかし、七十八年前の昭和二十年八月六日、広島に原子爆弾が投下されました。

私は、「伊勢市の代表としてこの広島の街に来たんだ。勉強しに来ているんだ。」という思いで広島に行ってきました。

まずは、平和記念公園へ行きました。原爆の悲惨さを改めて認識し、全世界の人々に訪れてほしい場所だと感じました。次に、原爆の子の像、原爆ドームの見学をしました。原爆の子の像は、被爆してから十年後、白血病になり短い生涯を終えた佐々木禎子さんの像です。そこに、厚生中学校全員で折った折り鶴を献納しました。その後、テレビや教科書で何度も見た原爆ドームを目の前にしました。実物を見て、原爆投下は本当にあったことなのだと実感しました。平和の尊さをつくづく感じました。次に、被爆証言者の田中聰司さんに貴重なお話を聴かせていただきました。一歳五か月で被爆した田中さんから色々なお話を聴いた中で「原爆被害は昔話ではない。」という言葉が私の心に刺さりました。原爆被害を受けたのは七十八年前。私は昔の話だと思っていました。しかし、田中さんのお話を聴いていると、原爆被害当時の話を聴いているように感じ、その悲惨さを知ることができました。短い時間でしたが、貴重なお話を聴かせていただき、とても勉強になりました。その後、平和記念資料館へ行きました。原子爆弾の開発から投下、後遺症、アメリカとソ連の関係、第二次世界大戦の終結、原爆と放射線被害者の苦しみと死など、全てが丁寧に語られていることに感動しました。写真や絵、発見された洋服や物などが展示されていて悲劇を肌で感じました。歴史に詳しくない私にとって良い勉強になりました。

翌日の八月六日に、広島平和記念式典に参加させていただきました。この広島に原子爆弾が投下され、多くの犠牲者が出てからもう七十八年が経ちました。毎年、式典をテレビ中継で見ていましたが、今年は実際に参列し、原子爆弾による被災者の方々のご冥福を心からお祈りするとともに、現在の平和のありがたさをつくづく感じました。今でも、世界のあちらこちらでは戦争が繰り返されており、多くの犠牲者が出ているのが現実です。戦争のない世界が一日でも早く来てほしいと心から祈りつつ、この地を後にしました。広島へ行き学んだたくさんのことを伊勢市のみんなに伝えていきます。

今では考えられない広島

厚生中学校　代表者

一九四五年（昭和二十年）八月六日、八時十五分に世界で初めて原爆が落とされた広島に、原爆投下から七十八年になる令和五年八月五日に初めて足を踏み入れました。その場所でしか味わえない雰囲気を肌で感じ、原爆の恐ろしさをしっかり学び、伊勢市に持ち帰り伝えていこうと思いました。

まずは平和記念公園へ行き、原爆の子の像や原爆ドームを見学しました。写真でしか見たことがなかったものを実際に見ると、原爆の恐ろしさがより伝わってきました。原爆ドームは骨組みしか残っておらず原爆の悲惨さを物語っていました。次に、被爆証言者である田中聰司さんに貴重なお話を聴かせていただきました。一歳五か月という幼さで被爆した田中さんは、母親から聴いたというお話も私たちに聴かせてくれました。原爆ドームだけでなく神社の鳥居も残っていたことなど初めて聴く内容が多く、勉強になりました。特に印象に残っている言葉は「原爆被害は昔話ではない」です。放射線の影響により、七十八年経った今でも人に病気をもたらし苦しめているのです。その後、平和記念資料館を見学しました。資料館の中は、まるでその場所にいるようなリアルさがありました。

八月六日、今回の平和学習の本題である広島平和記念式典に参加させていただきました。式典には外国人の方々も多く参加していることを初めて知り、核兵器の問題は世界各国が協力していくべき問題であると感じました。式典が進み、八時十五分になると黙祷が捧げられました。七十八年前の今、広島は世界で最も不幸な街になってしまいました。現在のような緑があふれ活気のある街からは考えられないような惨劇だったのだと改めて思い、核兵器のない世界の恒久平和を私たちがつくっていこうと決意しました。平和宣言が終わり、放鳩が行われました。家に帰ってから知ったことですが、平和の象徴である白い鳩が放たれていました。

式典が閉式してから、私たちは広島国際会議場へ移動し、青少年平和文化イベントに参加させていただきました。合唱はとても迫力があり、美しい歌声でした。

現在、地球上に存在する核弾頭の数は推定一万二千五百二十発と言われています。全ての核弾頭を一気になくすことは不可能かもしれません。しかし、少しずつなら減らしていけます。核弾頭を減らすという歩みを止めず、前へ進み続けていくことができれば、きっとこの世界に恒久平和が訪れる時が来ます。それがたとえ十年後、百年後であろうと世界唯一の被爆国の私たちが前に出て世界を誘導する必要があると思います。私は、その一人として伊勢市で今回学んだことを伝えたいと思いました。

広島で学んだこと

伊勢宮川中学校　代表者

「安らかに眠ってください　過ちは繰り返しませぬから」

この言葉は慰霊碑に刻まれています。

私は、広島平和記念式典に参加するまでこの日のことをあまり知りませんでした。今まで戦争について学校で習ったり、テレビで見たり、本を読んだりしてきましたが、広島に原爆が投下され多くの方が犠牲になり都市が壊滅したなどの知識しかありませんでした。

平和記念資料館では、爆心地から半径二、五メートルの市街地のＣＧ映像を見ました。広島の街が一瞬にしてなくなった様子がよくわかりました。また、ボロボロになった服、人の影が残った石、被爆した方たちの思いは、私が想像していた以上の悲惨さを伝えていました。

被爆証言者である田中聰司さんのお話を聴けたことは、戦後の広島を知ることができたので良かったです。田中さんは、一歳五か月の時に被爆し、お母さんは田中さんを背負いながら広島の街を、家族を捜すために歩き回ったそうです。皮膚がただれている人、水を求めている人、死んでしまっている人がたくさんいたそうです。この話を聴いて私は、以前テレビで見た光景を思い出しました。

原爆が投下された街は、放射線による被害も受けました。人はもちろん植物にも影響を与えました。生きている被爆者の方は約十一万人もいるそうです。被爆者の中には何らかのがんを患う方が多く、治療でつらい思いをしながら生活しています。田中さんも現在五つのがんと闘っています。中学生くらいまで原因不明の口内炎に悩まされていたそうですが、七十歳頃に同じ場所にがんが見つかりました。五十代の頃は、食道がんになり、六十代の頃には咽頭がんになりました。手術後には唾液が出なくなり全部の歯が虫歯になったそうです。それだけではなく、自分が被爆者だから、自分のせいで妻が流産したのではないか、子や孫が風邪をひくと放射線の影響ではないかと、とても不安になるそうです。田中さんと同じように、後遺症にずっと悩まされたり、差別を受け苦しい思いをしていたりする被爆者の方が多く存在します。子どもや孫ができても不安を抱え生きています。

私は、戦争や原爆のことは、もう過ぎた過去のことだと思っていたけれど、核兵器がなくなったわけでもなく、被爆した方たちが健康に過ごせているわけでもないということを改めて知りました。私たちがこれからも夢や希望を持ち続け、世界から戦争をなくすため、今回経験してきたことをみんなに伝え、一人でも多くの人に戦争の怖さ、原爆の恐ろしさを知ってもらい、平和に暮らしていくためにはどうすべきか、考えていきたいと思います。

広島平和記念式典に参加して

伊勢宮川中学校　代表者

昭和二十年（一九四五年）八月六日八時十五分、天気は快晴。そんな広島に突然起こった悲劇。人類史上初めて、広島に原子爆弾が投下されました。爆発の瞬間、強烈な熱線と放射線が四方へ放射されるとともに周囲の空気が膨張して超高圧の爆風となり大きな被害をもたらしました。突然、ピカッと辺りが光り、暴風で窓や扉が吹き飛ばされました。広島の街では多くの人々が被害に遭いました。幸福な日々を送っていた家族が一瞬にして不幸になりました。

私は今までニュースや本で見ましたが、他人事と感じているところがありました。平和記念資料館の見学で、八月六日の惨状、火傷と負傷にあえぐ被爆者、人影の石、頭髪が抜けた姉と弟の写真、焼け焦げた三輪車などを目にした時は悲しくなりました。七十八年前の情景が脳裏に焼き付きました。そして改めて命の重さを感じ、この出来事を忘れてはいけないと強く感じました。

今回、広島平和記念式典に参加するにあたって、千羽鶴を学校で折っていることを家族に話したところ、祖母が佐々木禎子さんのことを話してくれました。二歳で被爆をしてから十年後、白血病で短い命を終えた少女です。禎子さんは闘病生活中に「病気快復への願い」を込めて千羽以上の鶴を折りました。そうすれば病気が治り、学校へ行くことができると信じていました。しかし願いは届かず、十二歳で亡くなったとのことでした。千羽鶴は日本ではよく知られています。私も祖父が入院した時に千羽鶴を折りました。禎子さんが千羽鶴を折ったことが世界中に広がり「平和のシンボル」になりました。「原爆の子の像」、その姿の前に立ち、私たちも千羽鶴を献納しました。

私は、禎子さんの命をかけた思いを心に誓い、友だちを大切にします。戦争が子どもたちを苦しめるという悲しい出来事が二度と起こらないことを願います。

今回、広島平和記念式典に参加し、見てきたこと、聴いてきたことをしっかりと胸に刻み、友だちに、家族に、身近な人々にこの経験を伝えていきたいと思います。

大きな衝撃と事実

港中学校　代表者

私は人生で初めて広島に行きました。この二日間、数えきれないほど多くの衝撃と事実を目の当たりにすることになりました。

正直なところ、電車を乗っている時は観光気分で、行ったことのない街へ行くことにワクワクしていました。しかし、平和記念公園へ行き、原爆ドームを間近で見ると全身に電気が走ったかのような大きな衝撃を受けました。テレビや本でしか見たことのないものが、自分の目の前にあることが不思議な感じでした。本当に原子爆弾が落とされたのだと改めて実感しました。ボロボロになったドーム、その周りにはたくさんの崩れ落ちたものがありました。自分が立っているところに原子爆弾が落ちてきたらと想像すると怖くてたまりませんでした。誰も予想していなかった原爆投下。それは、考えられないくらい恐ろしいものだとわかりました。一瞬の出来事がこんなにも多くの人々を苦しめ、悲しみでいっぱいにしてしまったのです。原子爆弾はこの先もずっと永遠に使用してはいけないし、私たちにできる非核平和運動をしていかなければならないと強く思いました。

原爆の子の像を見て感じたのは、佐々木禎子さんの熱い思いです。白血病で亡くなった禎子さんは病気が治ることを願って鶴を千羽折ったと聴きました。そのことを聴いた時は、すごくびっくりしました。絶対に病気を治したいんだという気持ちが伝わってきました。願いは叶いませんでしたが、禎子さんのお話は多くの人に衝撃を与え、今も平和への祈りを込めて鶴を折る活動は続いています。原爆の子の像の周りには千羽鶴を献納するブースがありました。色とりどりの千羽鶴がたくさんあり、今でも佐々木禎子さんや原爆で亡くなった子どもたちのご冥福、そして平和を願って折られていることがわかりました。

平和記念資料館では、生々しい写真がたくさんありました。焼けただれた皮膚、腕がない人、死体の周りを歩く人、本当に怖くて見るのがものすごく苦しかったです。また、遺品などもあり、残酷だった当時にいるような感覚になりました。今生きていること、ご飯が当たり前のように食卓に出てくること、学校に行けること、全てが幸せでかけがえのないものだと感じました。そして一分一秒全てを大切にしたいと心から思いました。

私にできることはピースメッセンジャーとして原子爆弾の恐ろしさや、今をどれだけ大切にしなければいけないかを伝えることです。「語り手」が高齢化しているからこそ、私たちが行動しなければいけません。世界で唯一の被爆国民としてこのことを次世代へ伝え、永遠に語り続けることがこれからの平和に繋がると考えます。二日間の貴重な体験を活かし、私にできることを見つけ、たくさんの人に伝えていきたいです。

広島を訪れて

港中学校　代表者

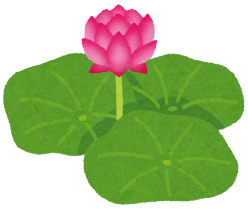
私は、今回初めて広島を訪れました。社会の授業で、広島に原爆が落とされた後の写真を見せてもらったことがあります。周りの建物は破壊され、人々は誰かを捜したり、がれきをどかしたりしていました。しかし、現在の広島は高層ビルが立ち並び、緑豊かな平和な都市に変わっていました。

私たちは、平和記念公園と平和記念資料館を訪れました。原爆ドームは建物の骨組みがむき出しになっていたり、がれきが地面に落ちていたりして、その場だけ雰囲気が違い、衝撃を受けました。資料館では、被爆した方の遺品や写真、絵が展示されていました。やけどを負い全身の皮膚がただれている人、被爆して死亡した人たちの山、原爆投下前に撮った笑顔の家族写真。どの写真も絵も見るのがつらく胸が痛くなりました。被爆証言講話では、田中聰司さんのお話を聴かせていただきました。原爆投下時、田中さんは一歳五か月で、母の親戚を捜しに広瀬北町に入って被爆しました。田中さんが小学生になり、昼食にお米を持って行かなければならなかったそうですが、中には持って来られない児童もいたそうです。そんな時、田中さんのクラスでは皆で持って来た米を分けて食べていたと聴きました。戦後のつらい生活の中、このような出来事があったと聴いて、私は、助け合いはとても素敵で、大切で、人を幸せにできるものだと思いました。

田中さんは学生時代、東京で出身地を尋ねられ、広島だと答えると「被爆者だから」という理由で差別的な発言をされ、つらい目にあったそうです。結婚してからは、子どもや孫に被爆の影響が出てこないかと、とても心配している表情で話されていました。自分が被爆してしまったせいで子どもたちが困っていないかを本当に心配している気持ちが伝わりました。

平和記念式典にはたくさんの人がいて、自分がどこにいるかわからない状態でした。原爆が投下された時刻に黙祷をし、岸田総理大臣や広島市長の挨拶を聴きました。こども代表の「平和への誓い」からは、戦争がどんなに悲しく、つらいものであるかを改めて思い知らされました。

広島の地に行って、私の戦争に対する思いが浅はかなものだったと気付かされました。私たちが過ごしている今が、どんなに平和か、資料館や田中さんのお話を聴いて実感しました。戦争という大きな過ちを二度と繰り返してはいけない。そのために、私たちがピースメッセンジャーとして、平和について考え、行動していきたいです。



平和の大切さを繋げる

城田中学校　代表者

初めて広島を訪れ、一番衝撃を受けたのは原爆ドームでした。写真でしか見たことがなかったので、実際に見ると、全く違う建物のように見えました。写真では、綺麗な感じに見えていたのに、実際は、壁が崩れ、がれきが散乱し、綺麗だとは言えないものでした。七十八年前の八月六日から今まで、この姿で建ち続けているのだと思うと、焼け野原になった広島の街の光景が見えてくるような気がしました。

私が原爆ドームを訪れた日も、原爆が落とされた日と同じように天気が良く、青空でした。その空を見ると、今、平和に生活していることにありがたさを感じました。

平和記念資料館では、原爆に関する写真などが、たくさん展示してありました。大けがを負った方や、広島が焼け野原になった様子を見ると、原爆の恐ろしさを痛感しました。知識として、広島の惨状を知っていたつもりでしたが、実際の写真を見ると、ここまでとは思わず衝撃的でした。

被爆証言講話では、自らの被爆体験を戦争を知らない人たちに語り継ぐ「語り部」の方のお話を聴きました。被爆者の高齢化が進み、語り継ぐ人が減っていることや被爆者の思いを知ることができました。私は、ここで聴いた話を受け継ぎ、次の世代に伝えていかなければならないと思いました。そして、一人ひとりが戦争について考えることが大切だと思いました。広島の地には、外国の方がたくさん訪れていました。外国人の方が原爆や戦争について関心を持っていることが、日本人として嬉しかったです。世界中のみんなが平和について考えていけば戦争はなくなると思います。

今、振り返ると広島平和記念式典への参加は、私にとって貴重な機会になり、とても感謝しています。広島や原爆について学び、平和の大切さを知ることができてよかったと思います。この広島訪問で、これから私たちがしていくことが明確にわかりました。それは、被爆した方々の思いを受け継ぎ、次の世代に伝えることです。平和の尊さを忘れず、平和な世界にするために自分にできることを考えていきたいと思います。そして、この経験が世界平和に少しでも早く繋がるように、活かしていきたいです。

平和を生きる私たち

城田中学校　代表者

私は伊勢市代表として広島を訪れました。テレビや社会の教科書でしか見たことのなかった原爆ドームでしたが、初めて目にした光景は、そこだけ時間が止まったような状態で、原爆を投下された時の様子が目に浮かぶようでした。建物や壁が崩れ落ちてなくなっているのがわかり、言葉を失うほどの衝撃を受けました。

次に被爆証言者の田中聰司さんのお話を聴きました。原子爆弾が投下されたのは、田中さんがまだ一歳五か月の時でした。田中さんは、当時の記憶は残っていないそうですが、お母さんが小さい田中さんを抱えて何度も防空壕へ一緒に逃げたことを教えてくれたそうです。被爆の影響で、田中さんは、今でも病気に苦しんでいます。何十年たった今でも放射線の影響で苦しんでいる人がたくさんいることを知りました。

その後、広島平和記念資料館に行きました。入り口には、顔や服に灰がふりかかっていて、腕に布を巻いた女の子の大きな写真があり、衝撃を受けました。資料館の中には戦争当時のものがたくさん置かれていました。原爆で燃えて白くなった壁、焼かれた肌、ボロボロになった服やボコボコにへこんだ水筒などを見ると、あの日の八時十五分、その場所に自分がいるような感覚になりました。また、小さい子どもが一人で泣いている姿、火傷で皮膚が剥がれ落ちている姿、包帯でグルグル巻きになった姿などたくさんの残酷な姿がありました。それを見て、何とも言えないつらい気持ちになりました。

あの日起こった八月六日のことを何とか止めることができなかったのかと今でも悔やまれてなりません。何の罪もない小さな子どもやたくさんの方が一瞬にして命を落としたことは、すごく怖く、悲しいことだと思います。同じ過ちを絶対に犯してはいけないと思います。

二日目には、広島平和記念式典に参加しました。岸田総理のあいさつや広島市の小学生が平和への誓いを述べるなどたくさんの人たちの話を聴きました。

私は戦争を経験していませんが、この二日間を通して感じたことや学んだこと、そして平和の大切さをたくさんの人に伝えていきたいと思います。今でも戦争が続いている国がたくさんあります。核兵器を所有している国もたくさんあります。一日でも早く、戦争が終わり、核兵器が廃絶されることを心から願っています。

ヒロシマは「昔話」ではない

桜浜中学校　代表者

広島平和記念式典への参加を通して、戦争をもう二度と起こしてはいけない、核兵器を使ってはいけないという思いがとても強くなりました。

私の祖父は戦争が終わって二年後に生まれましたが、お腹が空いていて生きるだけで精一杯だったとよく話してくれました。

歴史やテレビの放送で学んだり、平和学習で千羽鶴を折ったりして、平和の尊さ、戦争の恐ろしさをわかっていたつもりでした。しかし、実際に現地に足を運び、原爆ドームを目の前にした時、戦争というものは自分が思っていたよりもはるかに恐ろしく、悲しい出来事だということを身をもって実感することができました。

広島平和記念資料館では、八月六日に落とされた原子爆弾によってたくさんの人が亡くなり、今もなお苦しみ続けている人がいるということをたくさんの絵や写真から学ぶことができました。そして、広島がその後どのように復興し、現在のような緑豊かで笑顔溢れる都市になっていったのかがよくわかりました。

実際に、一歳の時に戦争を経験した田中聰司さんから被爆証言講話を聴かせていただきました。田中さんは被爆から何年も経ってからがんを発症し、今も治療を繰り返してみえます。原爆の後遺症として放射線の影響がずっと続いていること、ヒロシマは「昔話」ではないということを教えていただきました。田中さんの「核兵器をあなどってはいけない」という言葉は、私の胸に響きました。二十世紀最大の被害を出した原爆がどれだけ恐ろしいものかを実際に身をもって感じている田中さんの言葉だからこそ、胸に響いたのだと思います。

平和記念式典では、岸田総理大臣をはじめとする代表の方の挨拶や広島市長の平和宣言を聴き、世界恒久平和の実現や核兵器廃絶を求める思いをとても強く感じました。こども代表による平和への誓いでは、小学生の二人が、「私たちにもできることがある、身近にある平和を繋いでいくために行動していくことが大切だ」と話し、私にもできることがあるということを改めて実感することができました。

今回、伊勢市代表として出発する時、教育委員会の奥野さんが「全てのものに意味がある」とおっしゃいました。この言葉をずっと胸において広島で二日間過ごし、「これはどうしてここにあるのか」「なぜここにあるのか」と一つひとつのものに対して深く考えることができました。私は、伊勢に帰ってからもこの深く考えるということを続けています。この二日間でたくさんの貴重な経験をして学ぶことができ、平和に対する思いがより一層強くなりました。今ある平和の尊さ、戦争の恐ろしさ、もう二度と過ちを繰り返してはいけないという思いを学校や地域の人に伝え、これからを担っていく一員として行動していきたいと思います。

平和への願い

桜浜中学校　代表者

私は八月五日と六日に広島へ行き、実際に原爆の被害者である田中さんのお話を聴いたり、原爆ドームを見学したり、資料館を訪れ犠牲者の遺品を見たりしました。また六日には平和記念式典に参加させていただきました。

その中で印象に残ったのは平和記念式典です。七十八年前の同じ時間、この上空で原子爆弾が投下され、街が焼け、人々の生活を奪っていったのだと考えると、本当に悲しく感じました。

こども代表による平和への誓いでは、ハキハキとした声で平和への思いを誓ってくれました。代表者の曾祖父は、原爆で仲間を失ったそうです。その方の「なぜ、自分は生き残ったのか」という言葉と、こども代表の「生き残ってくれてありがとう」という言葉が心に刺さりました。生き残ってもつらいことばかりで、体の傷は治っても心の傷が残り、生きていることを悔やんでいる人が今もたくさんいるということを感じました。また、そんな思いを抱えながらも、同じ過ちを繰り返さないよう人々に体験を伝え続けてくれていることに感謝し、次は私たちが、身近にある平和を繋いでいていくために、自分にできることをしていきたいと思いました。

広島市長は平和宣言で、核を防衛目的に使うこと、核による威嚇を行っていることへの問題提起や、核兵器廃絶への思いなど、広島の人の思い、そして被爆者や八月六日に亡くなった人の思いが込められた宣言をしていました。核による威嚇をしなくても、安全で平和な世界になってほしいと思いました。あの日のことを語る人は、まるで生き地獄だったと話しています。そのようなことがもう二度と、世界で起きてほしくないと思いました。

私はこの二日間でたくさんの人に思いにふれることができました。資料館では、犠牲者の遺品を資料館に預け戦争の悲惨さを私たちに伝えたいという思いを感じました。田中さんの講話からは平和にかける思い、そして平和記念式典での広島の人々の思い、青少年平和文化イベントでの高校生の高い熱量や平和への願い、全ての場所にたくさんの思いが込められていました。だからこそ、私たちも平和への願いを訴え続けなければならないと思います。たくさんの命を奪い、今も苦しみ続けている人がいることを踏まえ、もう二度と、あのようなことがあってはいけないし、犠牲者を増やさないために、七十八年前のことと向き合い続けることが大切だと思います。そしてこれから先、自分の何代も後の世代でも、平和な世界でいられるように伝えていきたいです。まずは、身近な人に今回の広島訪問で考えたことや、見たり聴いたりしてきたことを伝えていきたいと思います。

核とこれからの平和について

五十鈴中学校　代表者

「平和とは何か」を改めて考えました。戦争がないこと、食べるものに困らないこと、命の危機を感じることなく生活すること。これらのことを私は、今まで当たり前に感じていました。

しかし、被爆証言講話で、一歳の時に被爆した田中聰司さんのお話を聴かせていただき、今ある当たり前の日々が、どれほど平和なものなのかを感じる機会となりました。田中さんのお話で印象に残ったことが三つあります。

一つめは、現代に生きる私たちの危機感の希薄さについてです。私は、今まで頭上にミサイルや爆弾が落ちてくるということを考えたことがありませんでした。田中さんは、この感覚が危険だと教えてくださいました。現在、世界にはまだ核兵器が存在し、私たちの身に降りかかる可能性は０パーセントではないのです。ロシアのウクライナ侵攻や、世界で起きている紛争で核兵器が使用される可能性もあります。何気なく毎日を過ごしていますが、二度と戦争を起こさないという気持ちを常に持っていなければ、またいつ戦争が起きてもおかしくないのではないかと田中さんの話を聴いて思いました。

二つめは、核兵器がもたらす生活の苦しさです。田中さんが小学生の頃の生活についてのお話を聴きました。学校へ行く時には米を持って行かなければならなかったそうですが、生徒の中には、米を持って来られない人がいたので、みんなで分け合ったということや、食べるものがなく闇市から盗んで生活をしていた人たちがいたことを聴きました。物資が足りない中で必死に過ごす様子に痛ましい気持ちになりました。一つの核兵器で、人々の命、生活が一瞬で壊れていくことに恐怖を覚えました。

三つめは、平和の尊さです。田中さんは、「平和がなければ夢も何も叶えられない」と言っていました。現代に生きる私たちは、自由に進路を決め、自由に就職ができます。世界では、この自由が認められていない国もあります。戦争で悲しい思いをする人がいなくなるために核兵器を根絶しなければならないと思います。世界で唯一の被爆国である日本。地球上に落とされた最後の原子爆弾が長崎であり続けなければならないと思います。

私は広島で、原爆の恐ろしさ、平和の尊さをはじめ、たくさんのことを学びました。戦後七十八年が経ち、被爆体験者の高齢化により戦争体験から学ぶ機会が減っています。だから、私がピースメッセンジャーとして、今回学んだ原爆の恐ろしさ、平和の尊さをまずは身近な人に、そして後世に伝えていかなければならないと強く思いました。

願い

五十鈴中学校　代表者

私は今まで、平和とは当たり前にあるものであり、平和の大切さを深く考えたことがありませんでした。しかし、広島平和記念式典に参加し、今までの私の考えがとても浅はかであったことを痛感しました。被爆体験者の田中さんのお話や、式典への参加を通して印象に残ったことが三つあります。

一つめは、戦争の悲惨さについてです。原子爆弾が落とされてから十年近く経った頃のお話です。田中さんが通っていた学校では昼食に米を持って行かなければなりませんでしたが、白米を持って来られるのは全体の二割、麦を持って来られるのが六割、何も持って来られない生徒が二割いるという状況でした。そこで、生徒の米を集めみんなで分けて食べたというエピソードを聴きました。戦争が終わってから十年近く経つのに、まだまだ苦しい生活を強いられていたことに驚き、戦争の悲惨さを感じました。しかし、一人あたりの食事もままならないのに、みんなのために行動できる人の温かさが印象的でした。

二つめは、被爆した方々が抱き続ける不安についてです。原爆症に関する様々なうわさが流れ、生活を送る上で出身地を伝えることが怖くなったと聴きました。また、妻が流産を繰り返すことで自分の被爆と関係しているのではないか、度重なるがん治療により、自分の子どもや孫たちに遺伝するのではないかという不安が続いているということです。五つのがんを患い闘病生活をされているというお話を聴き、いつまでも人々の生活をおびやかす核兵器の恐ろしさを感じました。

三つめは、平和記念式典への出席と平和記念資料館の見学で感じたことです。今年は、過去最多の百十一か国が平和式典に参加しました。世界中の人々が広島に集まり、平和を祈る。心が熱くなりました。式典では、たくさんのスピーチがありました。共通していたことは、「核兵器廃絶」と「世界恒久平和」でした。七十八年前から祈り続けているこの願いを私は、現地で聴くことができました。平和を願う気持ちの強さを肌で感じました。また、平和記念資料館では、戦争の悲惨さを物語る写真や、被爆した方の証言を目にしました。写真を見るだけで当時の方々の気持ちを感じ取ることは難しいですが、戦争の悲惨さを訴え続け平和を願う人々の気持ちを感じることはできたと思います。

今回、私は広島で一つの原子爆弾が無差別にたくさんの命を奪い、生き残った人々の人生を変え、実際にその地にあった生活や文化を失わせた事実を学びました。世界には、まだ核兵器が存在しています。世界では戦争が起こっています。広島に集まった世界平和を願う人々の思いをしっかりと受け取り、ピースメッセンジャーとして私が伝え続けていく必要があると思いました。

平和について

二見中学校　代表者

今回二日間広島を訪問し、その中で語り部の田中聰司さんのお話を聴く機会がありました。田中さんがお話の最初におっしゃっていたことは、ロシアのウクライナ侵攻はあの時の広島と重なるということです。去年ロシアがウクライナに侵攻を始め、毎日のように両国の人々が亡くなり、色々な建物が破壊されていることを、よくテレビやＳＮＳで目にします。広島の地を、ウクライナのような悲惨な状況にした原爆はやはり恐ろしく、悲しい兵器だと改めて認識することができました。そして田中さんは自分の今までの人生を語ってくれました。そのお話の中で、田中さんが大学生の時、被爆者だということで差別的なことを言われたこと、田中さんが一歳五か月の時に被爆し、半世紀以上経った頃に、原爆による病気が発症したというお話が特に僕の中で印象に残っています。どれもが原爆が投下された後に起きた出来事であり、原爆による被害はその人が亡くなるまで一生離れられないものだと、田中さんはおっしゃっていました。そして最後に田中さんは、今ロシアがウクライナに核による脅威をちらつかせているけれど、広島のような被害を二度と出さないためにも核兵器をいち早く、なくすことが必要であり、平和や幸せを築くために人は生きているとおっしゃっていました。核兵器という恐ろしいものをなくし、世界中の人々が平和に、そして幸せに過ごせるように、私たちもできることを少しでもやっていこうと思いました。

また、平和記念資料館を見学したことで、田中さんのお話をより深く理解することができました。田中さんのお話を聴いて自分の中で当時の広島のイメージがありましたが、実際に記録に残っているものを見た時、それらは自分のイメージをはるかに超えていました。皮は焼けただれ、包帯でグルグル巻きにされている人。雑に並べられている亡くなった人々。あまりにも酷い状況で本当に怖いと思いました。他にも原爆の強烈な熱線によって人の影が残っている石段があり、核兵器の恐ろしさをここでも痛感しました。

広島平和記念式典では、小学校六年生の代表二人による平和への誓いがあり、その中で「みなさんにとって平和とは何ですか」という問いがありました。僕にとって平和とは、全ての人が、綺麗な水を飲める、毎日ご飯を食べられる、何か病気になったら当たり前のように病院に行き治療してもらえるということだと思います。このような世界にしていくには、ユニセフに募金をするなど、私たち一人ひとりが行動することだと思います。そしてそれは田中さんのお話にも繋がってくるのではないかと思います。

最後に、今回の広島平和事業に参加したことで、色々なことを学ばせていただいたことに感謝し、一人でも多くの人に伝えていきたいと思います。

戦争の悲惨さ

二見中学校　代表者

八月五日、六日に実際に広島へ行き、平和記念公園や平和記念資料館の見学、田中聰司さんの被爆証言講話、広島平和記念式典への参加など、普段ではできないような貴重な経験をさせていただきました。田中さんは被爆時の様子や、その後の様々な被害について聴かせてくださいました。一歳五か月だった田中さんは、爆心地から半径二キロメートルが全滅地域と言われている中で、一キロメートル未満の場所で入市被爆しました。私がお話を聴かせていただいた中で一番印象に残っているのは、学生の頃、「広島の被爆者」だと意識させられ差別を経験したというお話です。田中さんが東京に行った際に被爆地である広島出身であることを仲間に伝えたところ、伝染病のような扱いを受けたと聴きました。それ以来、新聞社に就職するまで、広島出身であることを隠して生きてきたそうです。身体的な被害に加えて差別も受け、とてもつらかったと思います。被爆の後遺症で何回も、がんの手術を繰り返していて、立っていることも、喋ることもしんどいのに私たちにお話を聴かせていただき本当にありがたかったです。歴史を繰り返してはいけないという強い思いを感じました。

平和記念資料館を見学して、今まで見たこともなかった悲惨な被害を知ることができました。たった一発の爆弾により、広島の街と多くの人の未来が失われた八月六日午前八時十五分。爆心地の近くにいた人は跡形もなく即死。火傷を負い皮膚がただれ肉や骨が見えている状態で街を歩く人。道端に転がる沢山の死体。亡くなった一人ひとりに、夢や希望があったのに、それが一瞬にして消え、当たり前だった生活も一生戻らなくなりました。私たちと同じ年頃の子どものボロボロになった服や苦しんでいる様子を見ると、とても苦しくなりました。本年五月に行われたＧ７広島サミットで各国首脳が平和記念資料館の視察や被爆者との対話を経て記帳された芳名録は、こうした被爆者の願いが各国首脳の心に届いていることの証になっていると思います。けれども、世界では今、ロシアがウクライナへの侵攻に際し核兵器による威嚇を続け、核兵器の使用という現実的な脅威で緊張が高まっています。また、自国の安全保障体制の強化を掲げ核戦力の増強を進める国があるなど、核兵器を巡る情勢が厳しさを増し、国際秩序が大きく揺らいでしまっています。このような核保有国の為政者には、広島の地を訪れ資料館の見学や被爆者との対話をして、人々の命の重さや核兵器がどれほど危険なのかということをしっかり考え、感じてほしいと思いました。

今、何事もなく平和に生きている当たり前の生活に感謝し、生きていきたいと思いました。ピースメッセンジャーとして、核兵器の廃絶と平和な地球の実現のため、今回の経験を多くの人に伝えていきます。

私たちの使命

小俣中学校　代表者

私は被爆地である広島で、現状や被爆者の方の願いなどを知ることができました。

被爆証言講話では、田中聰司さんのお話を聴かせていただきました。田中さんは、「テレビで戦争のことが映るたびに、あの日を思い出す」とおっしゃっていました。七十八年経った今でも鮮明に覚えているのは、それほど自分の人生に影響があったからだと思います。現在、田中さんは五つのがんと闘っています。それらは全て被爆の影響によって発病したものです。田中さんは被爆から六十年ほど経って原爆症とわかったそうです。そのような方はたくさんおられます。それに、田中さんは東京に出てきてから、被爆者であるために差別を受けた経験があり、それからは人にどう思われるかを心配し、自分が被爆者であることを隠すことに必死になっていたそうです。原爆は多くの人の人生を変えました。何をするにも被爆者であるということが付きまとうようになったのです。今は本当に平和なのでしょうか？現在、世界では核兵器が作られています。今が本当に平和なのかを考え、私たち国民は訴え続けていくべきなのです。田中さんは、「あの日のようなつらい出来事を、経験してほしくない」という強い思いがあるから、戦争を経験していない私たちに自分の体験を伝え続けてくれているのだと思います。私たちはそれを受け止め、語り継いでいくべきだと感じました。

平和記念式典に参加して、私は政府の方と私たちでは考えが違うのだろうと思っていましたが、岸田内閣総理大臣の挨拶を聴き、立場に関係なくみんなが核兵器のない平和な世界を願っているのだとわかりました。広島県知事の挨拶では、「責任」の話がありました。今世界では、ロシアが核兵器による脅しをしていたり、北朝鮮が核兵器の開発を進めていたりして、厳しい駆け引きが行われています。開発中のものが爆発するなど何かあった時に、地球上の全ての生き物に対して責任がとれるのでしょうか。人類滅亡さえあり得ます。これまで私は「核兵器を使わなかったらよい」と思っていましたが、そうではないことを知り、核兵器の影響力を改めて学びました。核保有国の首脳らも、G7広島サミットに参加し被爆者の話を聴き、日本国民の願いに触れたと思います。それなのに、世界では核兵器の開発が進められ、駆け引きが行われています。日本もその戦争に巻き込まれる可能性は充分にあります。他人事ではないのです。政府だけの問題ではないのです。私たちはこの世から核兵器がなくなるまで、訴え続けなければなりません。

私は被爆者の現状や願いに触れ、自分が思っていた以上に危険な状態にあることを知りました。私たちの使命は、過去の過ちをよく知り、核のない世界になるように訴え続けていくことです。

「本当の平和」を実現するために

小俣中学校　代表者

八月五日、私は初めて広島を訪れました。まず、原爆の子の像に、全校生徒で折った千羽鶴を献納しました。そこにはたくさんの千羽鶴が献納されていて、色々なところから平和を願い、千羽鶴が届いているのだと感じました。

次に、田中聰司さんから被爆証言講話を聴かせていただきました。実際の出来事をとても細かく話してくださり、怖くて苦しかったことが目に浮かぶようでした。戦争を体験した人は、私たちが想像するよりずっと怖かったと思うし、これからどうなるか不安だったと思います。戦争が終わっても後遺症が残り、まだ今も後遺症と闘っている人がいます。そのことを忘れてはいけないと感じました。田中さんは、「原爆の話は昔話ではない」と言っていました。戦争を体験していない私たちがしっかりと学ぶべきなのだと思いました。

平和記念資料館では、当時の写真や焼けた服などを見て、戦争の恐ろしさを感じました。資料館の中を進むにつれて空気が重く感じるようになり、呼吸がしづらくなりました。苦しんでいる人や泣いている人の写真を見て、改めて戦争はしてはいけないと思いました。

六日に行われた平和記念式典には、多くの人が来ていて、外国の方もたくさんいました。私は、こども代表の「平和への誓い」を聴いて鳥肌が立ちました。「みなさんにとって、平和とは何ですか」という言葉で語りかけるように始まった「平和への誓い」には、広島の子どもたちの平和への思いが込められていました。

私が訪れた広島は、とてもきれいな街でした。しかし、七十八年前、広島の街は原爆によって一瞬にして破壊され、数えきれないほどの多くの人の命が失われたのです。この二日間で見たり聴いたりしたこと、感じたことなどは、みんなに伝えていかなければいけないと思いました。

今回、平和記念式典に参加して、私は「本当の平和」について学び、考えることができました。誰もが自分の夢や希望を叶えるために全力で頑張ることができ、そして、まわりの人の夢や希望も応援することができるような世界になれば「本当の平和」を実現できると思いました。広島で学んだことを身近な人に伝え、これからも平和について語り継ぎ、広げていきたいです。そして、私が思った「本当の平和」を実現させるために、今自分にできることをしていきたいです。

平和について

御薗中学校　代表者

一日目は、原爆ドームを見学しました。見ていると、今にも崩れてきそうで、原爆がどれだけ恐ろしかったのかがとても伝わってきました。その後、被爆証言講師の田中聰司さんのお話を聴きました。原爆は身体だけでなく、心にも大きな傷を残したこと、その影響は被爆した方だけでなく後の世代をも苦しめていること、そして自分の大切な家、家族、街、全てがなくなってしまったこと。たくさんのものがたった一発の原子爆弾で奪われたかと思うと、とても胸が苦しくなりました。そして、この悲劇をもう二度と起こさないためにも、この話を私たちが繋げていかなければいけないと思いました。

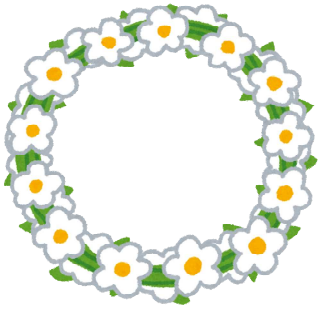
資料館では、当時の写真や服などを見ました。写真を見ていると苦しくなりました。戦争は本当に恐ろしく、苦しいものであると思いました。また、今あるこの何気ない日々がどれだけ尊く、素晴らしいものであるかということに気付かされました。

二日目は、平和記念式典に参加しました。そこで広島や日本の人に限らず、世界中のいろんな国の人たち、子どもから大人まで様々な人たちが平和を望んでいることがわかりました。

広島へ行き、平和や戦争について色々なことを考え、学ぶことができました。そしてこの平和を守っていくためにも、私たちが当時の出来事を聴き、それを話し伝え、繋いでいくことが大事だと学びました。一人の与える力はとても小さいかもしれません。でも、みんなでやればとても大きな力になります。そうすればこの戦争の話はより多くの人に伝わり、その先の世代にも繋がっていくと私は考えます。

そしてもう一つ、平和のためにはみんなで考え意見を交わすことが必要だと考えます。一人が考えるだけではその意見はなかなか多くの人に伝わりません。けれども、多くの人が考えることによって色々な人に共感されたり、もっとこうした方がいいと意見をもらったりすることができます。みんなが平和について考えることでみんなの平和への意識がより高まり、より良い平和に近付いていくと考えます。

この二つはどちらも一人ですることはできません。みんなで考え、伝えていくことが平和への第一歩だと私は考えます。



広島平和記念式典で学んだこと

御薗中学校　代表者

広島平和記念式典への参加で貴重な時間を過ごし、色々なことを学ぶことができました。

私が特に印象に残っているのは、被爆証言講話です。お話を伺った田中さんは、原爆投下時、一歳五か月で被爆の影響から食道がんなど五つのがんを経験された方でした。あの一瞬で家や大切な家族、大好きだった友人だけでなく夢や希望、身の回りにある平和、全てを奪われたとおっしゃっていました。私の回りにはかけがえのない家族、友人、当たり前のようにたくさんの平和、笑顔があります。当たり前を一瞬にして奪われた多くの人々は、私が考えることもできないような恐怖、絶望を感じたのだと思います。そして原子爆弾は生き残った人にさえも深い心の傷を与えました。田中さんは友だちの「原爆ってうつらないよな？」という何気ない一言に大きなショックを受けたそうです。その後、広島出身であることを伝えたところで自分にとってプラスにならない、仕事をもらえなくなるのではないかという理由で、被爆のことを隠すようになったとおっしゃっていました。私は、なぜ被爆者の方々が何年経っても隠してつらい思いをしなければならないのかと思いました。今の社会にも昔と変わらず差別があります。それは何も知らない私たちが相手のことを知ろうとせず、正しく理解していないからだと思います。そのため、私たちは自ら学んでいく必要があると思います。

田中さんのお話を伺い、私は改めて原子爆弾は絶対にこの世界にあってはならないものだと感じました。現在、多くの国が国家を守るためなどの理由で核を保有しています。自衛は大切だと思います。けれども、核でそれをするのはおかしいと私は思います。日本のような悲惨な目に他の国があわないようにしなければなりません。しかし、一つの国が核を持っていると他の国も持たざるを得ない状況になります。この問題は日本だけでは解決できないので世界中が平和の大切さを考え、一刻も早く核がこの世界からなくなることを私は願います。

原爆被害は昔話ではなく、未来にも続いていく問題です。被爆者の平均年齢は年々上がっており、今年八十五歳を超えました。戦争の記憶がある人が年々少なくなっている中、戦争への恐怖も薄れていっていると思います。また他国で戦争が起こる中、核を持つことが普通にならないように、何か争いがあった時でも、武力でなく話し合いで解決できる世界になってほしいです。そのためにこれからの私にできることは、色々な考えの人を決して差別することなく互いを認めあうこと、身近にある平和を繋いでいくために思いやりのある行動をすることです。学校代表で広島に行かせてもらった者の使命として忘れることなく守り、周りに伝えていきます。

広島平和事業に参加して

倉田山中学校　代表者

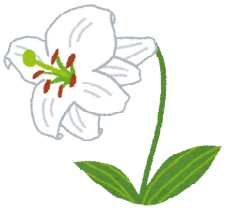
八月五日、六日に広島平和事業に参加し、被爆証言者の田中さんのお話、平和記念資料館の見学、平和記念式典への参加を通して、平和や原爆について学びました。

私は最初、原爆についてニュースで見た、ネットで調べたぐらいのことしか知りませんでした。しかし、原爆を実際に経験した田中さんのお話や平和文化イベントでのお話を聴き、たくさんの人々が、原爆によってケロイドやがんなどに苦しめられているということがわかり、原爆の被害は私が思っていたよりも恐ろしいものだとわかりました。原爆は今から七十八年前の八月六日午前八時十五分に広島に投下されました。熱線と放射線、爆風の三つが複雑に混ざり合ったことによって大量破壊、大量殺戮が無差別に引き起こされ、生き残った人たちも後遺症などに苦しめられました。人を殺すことは絶対に認められないことなのに、たくさんの人が一瞬にして殺されたことは考えられないくらいとても衝撃的なことだと思いました。さらに、今も後遺症などに悩まされている人がいることを知り、原爆はとても長い期間人々を苦しめるものだと改めてわかりました。

資料館には、子どもたちが被爆した時の服や水筒、三輪車などが展示されている所がありました。ボロボロになったものがほとんどで、とても痛々しかったです。私より小さい子どもたちが原爆によって苦しめられていたんだと思うと、とてもつらい気持ちになりました。もっと長く生きられたはずのに、たった一つの核兵器によって命を落としてしまったことがわかり悲しかったです。

平和記念式典では、何人もの方の挨拶がありました。その中の小学生代表による平和への誓いで「生き残ってくれてありがとう。命を繋いでくれたからこそ、今、私たちは生きています。」という言葉がありました。この言葉を聴き、本当にその通りだと思いました。生き残った人たちの中には、生きることが苦しい人もいたと思います。けれども、生き残ってくれたから、生きていてくれたから、今、私たちは学校に行き、友だちと遊び、ご飯を食べることができています。だから私はとても共感できました。

今回広島に行き、原爆の恐ろしさ、平和の大切さをたくさん感じました。原爆によって起こった被害を伝え続けるため、核兵器のない世界を実現していくため、周りの人に、今回見たこと、聴いたことを伝えていきたいと思います。そして、たくさんの人に、核兵器や平和についてこれからどう向き合うべきなのかを、もう一度考えてみてほしいです。



平和のために

倉田山中学校　代表者

平和のためにできることとは何か考えたことはありますか。今年で広島、長崎に原爆が落とされてから七十八年になりました。戦争経験があるという人は、意外と身近にいるのではないでしょうか。もしかしたら私たちの祖父母も経験があるかもしれません。けれども、原爆を落とされ、いまだに後遺症に苦しんでいる人がいる国にも関わらず、他人事のように感じている人が多いと思います。実際、私もテレビで見たことがあるくらいでした。今回初めて広島に行き、戦争の実態や悲惨な被害などを知ることができました。

広島での思い出は、良いものと捉えることはできますが、戦争の恐ろしさは思っていたよりも何倍も大きかったです。たった一瞬の光で何万人もの命が失われたという事実を、聴けば聴くほどつらく感じ、今当たり前のように生活できていることが幸せだと実感しました。実際に被爆者である田中さんのお話を聴きましたが、当時幼かったにも関わらず家族を、広島という街を、文化を失ってしまい、今でも行方がわからない方がいるそうです。自分がその人生を歩んでいたらと考えるとゾッとしてしまいました。

田中さんは後遺症と五つものがんと闘いながら、平和の尊さを今もなお色々な方たちに伝えています。私たちよりもずっとずっと苦しい思いをし、私たちよりもずっとずっと平和な世界を祈っています。このままでいいのか、やはり考えてみる必要があると思います。

平和記念式典では、広島市長も広島県知事も小学生の代表までもが同じように、平和への思いを伝えていました。日本は第二次世界大戦以降、戦争をしていませんが、世界のどこかでは今この時も戦争をし、命が亡くなっているんです。核兵器を持っている国があるんです。それでは、平和な世界だと言えないと思います。

私は戦争のない場所に生まれ、一度も命の危機を感じたことがありません。これが世界共通かと言われれば絶対に違うと思います。大人同士の戦いに怯え、苦しみながら生きている子どもたちがいるんです。

戦争はいけないことだ、平和を望んでいるんだと言う人がほとんどだと思いますが、それを発信している人はあまりいないのではないでしょうか。戦争を望む人に伝えなくてはならないと思います。生きることが当たり前にできるようにお互いの命を大切に考えなくてはならないと思います。戦争の悲惨さを忘れ去られることがないように、次の代の子どもたちに伝えていきましょう。それが世界の平和を守るためにできる一歩だと思います。